

41 明治政府お雇い外国人医師スクリバ博士の外科と植物高橋日出雄¹⁾, 高橋 薫²⁾¹⁾高橋クリニック, ²⁾タカハシクリニック

明治初期における日本の近代医学はドイツ医学を採用した。それに伴ってドイツ人医学者が教師として来日し、大学で教鞭を執った、その中で明治13年からユリウス K スクリバ博士が日本において、東京帝国大学医学部外科での近代西洋医学教育に多大な貢献と実績を残している事がよく知られている。しかし、スクリバ博士が日本に来る前、ドイツでの履歴、医学的実績や植物学の業績などについては十分に知られていない。そこで、なぜ、スクリバが日本で大学教授として、ドイツでの候補者の中から選ばれ招聘されたのか、その理由を求めて、得られた資料の中から検討をおこなった。また、なぜ医学と共に植物学をも興味を抱いたのか、その業績のなかで植物に関するドイツでの古書や書籍を買って調査を行った。数少ない文献と関連資料から少数だが、知見が得られたので報告する。

まず、スクリバは1848年生まれで、家系的に祖父と父親ともに薬剤師の家柄であった。1869年ハイデルベルグ大学医学部に入学し、同時に植物学をも学んでいる。このとき大学外科ではグスタフ ジモン教授のもと、当時の社会状況を反映した軍陣医学や腎臓医学、婦人科学などを学んでいる。ジモン教授は世界で初めて腎臓摘出術を施行したといわれ、その影響かスクリバは日本で初めてといわれる、東京帝国大学で腎臓摘出術をおこなっている。ハイデルベルグ大学の卒論は脊椎側弯症の治療法で、このとき医師の資格を得ている。その後1年間近く、ベルリンに行き、当時の世界的外科学界の権威であるベルナルド ランゲンベック教授のもとで研鑽を積んでいる。ドイツ外科会創設したランゲンベック教授はその子弟に日本でも有名な胃外科のビルロートがおり、その他著名な外科医も弟子としてもっている。スクリバは1875年フライブルグ大学医学部外科に出局している。フライブルグ大学では外科教授ヴィンセント ツェルニー教授の助手として、研究を行っている。ツェルニー教授は胃癌手術で有名なビルロートの弟子であり、スクリバは動物実験で犬の胃全摘手術を成功させている。この様に当時、世界的に医学の最も先進国であるドイツでの一流の恩師についてスクリバが日本における医学発展のために招聘されたものと推察される。また、植物学に関して、ルードヴィヒ ドッシュュとの共著の書籍は計3巻がある。ヘッセン地方の植物を詳細に記載した、出身地周辺の地域の植物をドッシュュと共に採集し、詳細に観察、記載している。1873、1878年とさらに1882年小冊子であるが、その本の冒頭にドッシュュとスクリバの恩師であるシュルツについて謝辞を述べているが、シュルツ、ドッシュュ、スクリバともに父親が薬剤師である共通点がみつかった。スクリバはそれぞれ20才先輩のドッシュュ、更に20年先輩のシュルツに植物学を学んだ可能性がある。IPNIによるスクリバの詳細は植物の範囲での興味は特に顕花植物とシダ植物で、日本でもスクリバは週末、関東周囲に野鳥ハンティングの帰り、多くの植物を採集して、自宅の棚に保管していると、後の外科弟子である土肥慶蔵の日記にも記録されている。小生の母の叔父である明治生まれの耳鼻科医の再婚相手はスクリバ次男の元妻トモエさんで、スクリバの遺品のなかで植物標本もいくつか持っていたと聞いていたが残念ながら現存しない。スクリバは医局員や学生を自宅に招いて、蝶の標本を見せたり、庭先の椿の花を指して、即座に学名で *Camelia japonica* と説明をしてその学術的な知識を彼らに教えている。